菩薩道の倫理

『無量寿経』の場合——（その二）

田路　慧

凡夫往生の道

貴賤貧富賢愚善悪老若男女を問わず、一切の衆生が容易に実践でき、しかもすみやかに浄土往生することのできる道を示すものとして、古来浄土教家達は阿弥陀仏の四十八願中の第十八願に注目し、そこから「念仏」という独得の実践法を導き出してきたが、われわれもこの第十八願の思想的意義を考察することによって、この凡夫往生の道を明らかにしたいと思う。

阿弥陀仏の第十八願は次のとおりである。

「たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信楽して、わが国に生まれんと欲して、乃至十念せん。もし、生まれずんば、正覚を取らじ。ただ、五逆（の罪を犯すもの）と正法を誹謗するものを除かん。」（一三六）[註]

この願文を理解するためには、まず阿弥陀仏とその浄土の意義を解明しなければならないであろう。

阿弥陀仏

仏という言葉は「さとった人」を意味し、具体的には釈尊をさして用いられたが、やがて仏陀観の発展とともに、さとりの内容である真理そのものをも意味するようになった。そして真理そのものが人格化、擬人化され、仏・如来と呼ばれ、真理の現われ方の多様性、人々の真理把握の多様性によって、数多くの仏が生みだされてきた。阿弥陀仏は、自己と他己の救済、一切衆生の救済は、理想社会「清浄仏国土」の建設においてのみ可能であるという真理を示現するために生みだされた仏であると言うことができよう。

「如より来生して、法の如如を解り…。」（一七四）という叙述にもみられるように、阿弥陀仏は真如（空）より出現した真如そのものであるから、阿弥陀仏を実体化し対象化してとらえることは誤りであって、あくまでもはたらきとして、作用的主体として把握しなければならない。すなわち阿弥陀仏は、はたらきそのものとして、今、ここで、現に法を説き、われわれに語りかけ、はたらきかけていると解すべきなのである。すなわち阿弥陀仏はわれわれが浄土を願い、真実への心を起こすとき、即座にわれわれの前に出現するのである。「法蔵菩薩、いますでに成仏して、現に西方にます。」（一四六）という表現や、阿難が阿弥陀仏に礼するやいなや、即時に阿弥陀仏が出現し、その浄土を見る叙述（二〇二—三）はこのことを意味していると言うことができよう。また阿弥陀仏の二つの呼称、無量寿仏と無量光仏は、真理の永遠性と普遍性を表わすものであり、救済の永遠性普遍性を示すものと言うことができよう。

かくて阿弥陀仏は、釈尊の教えの永遠不滅なることを信じ、自己の救済は浄土建設による一切衆生済度の実践においてのみ可能であり、かかる浄土の教えこそ仏教の真実性を開顕するものであると信じた人々によって、幸福こそ人間の本質的な願いであり、全世界が「幸いあるところ」浄土となって、全人類が幸福になることこそ人類の悲願であることを示現する仏として把握され、信仰されてきたのであり、今も現にわれわれ衆生に呼びかけ、はたらきかけていると解すべきであろう。

浄　土

阿弥陀仏は一切の衆生を済度するために理想社会建設を誓願し、六波羅蜜を実践して浄土を完成し、成仏したと経には述べられ、釈尊は阿弥陀仏とその浄土の有様を説いて、「汝らも阿弥陀仏の浄土に往生し、阿弥陀仏のごとく浄土を建設せよ。」と勧め、浄土を志願する者は阿弥陀仏に浄土完成と成仏を保証されると述べられている。阿弥陀仏とその浄土は人類救済の模範として、その原理と方法を明らかにするものと言うことができよう。

「十方より来れる正士の、われ、ことごとくかれの願いを知る。（そは）厳浄の土を志求することを。（かれ）決を受けて、まさに仏となるべし。一切の法は、なお夢・幻・響のごとしと覚了して、もろもろの妙なる願を満足せば、かならず、かくのごときの刹を成ぜん。法は電・影のごとくなりと知りて、菩薩の道を究竟し、もろもろの功徳の本を具せば、決を受けて、まさに仏となるべし。もろもろの法の性は、一切、空・無我なりと通達して、専ら浄き仏土を求めば、かならず、かくのごときの刹を成ぜん。」（一六七―八）

このように阿弥陀仏の浄土は六波羅蜜の実践、すなわち空・無相・無願三昧を体得実践して社会を清浄化することによって実現された清浄真実の世界、「無為自然」（一八七）の世界である。したがってわれわれも阿弥陀仏の浄土に往生し、阿弥陀仏の浄土を模範として浄土建設を志願し、菩薩道を実践して、諸法の無自性空なることを体得することによって、浄土を完成し、成仏することができるのである。自己の苦悩、社会の汚れはすべて無明煩悩より生ずるのであるから、真理の体得実践による社会の清浄化、真実こそ、自己と他己が共に救われる道である。かくて阿弥陀仏の浄土はわれわれ衆生が真理を体得実践するための道場であると言うことができよう。このことは見道場樹の願をはじめとして、阿弥陀仏の四十八願の多くが真理獲得の修行に関するものであり、浄土とその菩薩の描写が法と修行につらぬかれていることをみても明らかである。

また浄土は（その一）でみたように、人間の道徳的、宗教的、文明的な、一切の願いが満たされるところである。人間は衣食住の充足なしには生きてはいけず、物質的満足も幸福の源であることは疑いえない事実である。阿弥陀仏の浄土が単なる抽象的なさとりの世界としてのみ描かれず、人間の一切の願いが満たされる「幸いあるところ」（四五）として描かれていることは意義あることと言えよう。

ところで経にも述べられているように、（二〇六）、人間は物質的世俗的欲望の充足だけでは満足せず、より高い、より真実な満足を求めるものである。物質的な満足も真実に支えられるとき真の喜びとなり、真実に導びかれない物質的繁栄はかえって人間を不幸にするものである。真の幸福は真実の生き方においてのみ享受することができるのである。浄土は人間の一切の願いが真実に導びかれて満たされるところ、仏の願いと衆生の願いが相即するところと言うことができよう。そして阿弥陀仏の浄土は衆生の願いの発展とともに無限に発展し豊かになっていくのである。

仏（真実）は衆生に呼びかけ、その心をとらえ、衆生を真実化し成仏させるはたらきそのものであるから、衆生が仏の呼びかけに応答し、仏の光に包摂されて自己の本質を自覚し、人生の価値と意義を見いだすとき、仏の救済は完成し、仏も仏としての自己を完成するのである。浄土は、仏から衆生への呼びかけと、衆生から仏への応答が成立するところ、仏と衆生の呼応の場と言うことができよう。そして仏と衆生の呼応をとりもつのが浄土の菩薩である。

阿弥陀仏が浄土を完成し、現に法を説いているということは、呼応

の場、衆生救済の場が完成し、仏からの呼びかけが行なわれているということであろう。そして衆生がその呼びかけに応答することが浄土往生であり、阿弥陀仏が凡夫に廻向された応答の方法が第十八願であると言うことができよう。

かくて浄土は無為自然の世界として、仏が仏を生み、真実が無限に顕現し拡大していく場なのである。

「また、衆宝の蓮華、あまねく世界に満つ。一々の宝華に、百千億の葉あり。…一々の華の中より、三十六百千億の光を出す。一々の光の中より、三十六百千億の仏を出す。…一々の諸仏、また百千の光明を放ちて、あまねく十方（の衆生）のために、微妙の法を説きたもう。かくのごときの諸仏は無量の衆生を、仏の正道に安立せしめたもう。」（一六一―二）

念　仏

第十八願には「十方の衆生、至心に信楽して、わが国に生まれんと欲して、乃至十念せん。もし、生まれずんば、正覚を取らじ。」と述べられ、下巻の第十八願の成就文には、「あらゆる衆生、その（無量寿仏の）名号を聞きて、信心歓喜せんこと、ないし一念もせん。至心に廻向して、かの国に生まれんと願わば、すなわち往生することをえて、不退転（の位）に住す。」（一六三）とあるように、阿弥陀仏は、衆生が阿弥陀仏の名号を聞いて至心に信じ喜び、阿弥陀仏の浄土に往生したいと願って、たとえ十たびでも念ずるならば、必ず浄土に往生させると誓願し、浄土を建設してこの願を成就し、成仏したとされ、ゆえに衆生は阿弥陀仏の名号を聞き、信心歓喜して、一たびでも念ずれば、即座に往生することができると述べられている。したがって「聞名」と「念」が往生の秘訣であると言うことができよう。

「念」とは、下巻の三輩往生の文の中に、「まさに無上菩提の心を発して、一向に意を専らにして、ないし十念に、無量寿仏を念じて、その国に生まれんと願うべし。」（一六五）とあるように、無量寿仏すなわち阿弥陀仏を念ずることである。

かくして「阿弥陀仏を念ずる」念仏という浄土往生の道が明らかにされ、愚癡罪悪の凡夫が残らず容易に実践でき、しかもことごとく必ず往生して仏の救済にあずかる道が確立されたのである。

聞　名

先きの引用に、「あらゆる衆生、その（無量寿仏の）名号を聞きて、信心歓喜せんこと、ないし一念もせん。」とあるように、「阿弥陀仏の名号を聞くこと」、「聞名」は、念仏の契機として、浄土往生において重要な意義をもっていると言うことができよう。

「名を聞く」とは、第十七願の「たとい、われ仏となるをえんとき、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称えずんば、正覚を取らじ。」（一三五―六）という誓願によって成就された諸仏の讃歎したもう阿弥陀仏の名を聞き、阿弥陀仏の本願とその浄土のことを知って、心を開き、疑いを捨て、浄らかな信をうることである。

真実化のはたらきそのものとしての真実は、無限に人間にはたらきかけ、呼びかけており、真実を体得し真実そのものとなった仏達も、真実を不断に讃歎し、真実へと衆生の眼を開かせ、導き、真実を体得させんと呼びかけ、はたらきかけているのである。阿弥陀仏の名を聞くことは、真実そのものとしての阿弥陀仏の呼びかけ、はたらきかけに接し、真実へと心を開くことと言うことができよう。すなわち聞名は仏のさとりへの出発点なのである。

阿弥陀仏の四十八願中、第三十四、三十五、三十六、三十七、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十七、四十八の各願に、「わが名字を聞きて」という言葉があり、聞名によってそれぞれ、無

生法忍を得(三十四)、仏道を成じ(三十六)、清浄解脱三昧、(四十二)、普等三昧を逮得し(四十五)、不退転の位に至る(四十七)(四十八)と述べられて、阿弥陀仏の名を聞くことは仏のさとりに直入する道であることが明らかにされている。

ところでわれわれ衆生は縁起所生の存在として無自性空の当体であり、本来真実そのものなのであるから、仏の声、空無我の声、真実の声を聞かざるをえないのである。「はたしてこれでよいのか。」と呼びかけ、自省させてやまぬ内心の声こそ、本来的自己の声、仏の声なのである。煩悩具足罪悪深重の自覚、この世の穢土たることの自覚こそ、阿弥陀仏の名を聞くことであるとも言うことができよう。

かくて聞名とは、内より外より呼びかけてやまぬ真実の声を至心に聞くことであり、この声に耳をかたむけ、ただひたすら真実を求めてやまぬ心が念仏であると言うことができよう。至心に阿弥陀仏の名を聞き、阿弥陀仏を念ずるとき、その本願力により、真実の真実化のはたらきに乗ぜられて、われわれ衆生は即座に迷いと苦悩の世界から真実の世界「浄土」に自然に帰入し、浄土の菩薩となって真実の道を歩み始めるのである。

「法を聞き、楽しんで受行し、疾く清浄の処をえよ。かの厳浄の国に至らば、すなわち速やかに神通をえ、かならず、無量尊において、記をうけて等覚を成ぜん。その仏の本願力により、(仏の)名を聞きて往生せんと欲えば、みな、ことごとくかの国に到りて、おのずから不退転(の位)に致らん。」(一六八)

光明摂取

聞名はまた阿弥陀仏の光明に摂取されて、無明煩悩に支配され、我執我所執に駆り立てられる人生から、真実の光に照らされ、導びかれる光ある人生に転入することを意味する。聞名とは、阿弥陀仏の光によって点火されて一隅を照らすものとなることであると言うこともできよう。

「無量寿仏の威神光明は、最尊第一にして、諸仏の光明の及ぶこと能わざるところなり。あるときは、仏の光の、百仏の世界、あるいは千仏の世界を照らすことあり。要をとりてこれを言わば、すなわち東方の恒沙の仏刹を照らす。…このゆえに無量寿仏を、無量光仏・無辺光仏・無礙光仏・無対光仏・燄王光仏・清浄光仏・歓喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏と号す。それ衆生ありて、この光に遇う者は、三垢、消滅し、身意、柔軟にして、歓喜・踊躍し、善心生ず。もし三塗の勤苦の処に在りて、この光明を見たてまつれば、みな、休息をえて、また苦悩なく、寿終りて後、みな解脱を蒙る。」(一四八―九)

浄土往生

かくて浄土往生とは、人生観世界観の大転換、生き方の一八〇度の転換を意味すると言うことができよう。すなわち我中心の世界観から真理中心の世界観へ、無明煩悩に支配された人生から真理に導びかれる自由な人生へ、自分さえ自分だけはと目先きの我利我欲に駆り立てられる生き方から一切衆生と共に幸福になるために阿弥陀仏に導びかれて浄土を建設するという大理想に向って邁進する生き方への一八〇度の転換を往生と言うのである。まさに往生の原語 Pratyājāyate が「再び生まれる」「生まれ変わる」という意味をもつゆえんである。

縁生せるものとしてのわれわれ衆生は本来無自性空であって真実の発現そのものなのであるが、無明により自己の本質を知らず、真実の世界を転倒させて煩悩にもとづく主我的妄想世界を形成し、その中で迷い苦しんでいるのである。したがって浄土往生とは転倒された世界の再転倒、妄想転倒の世界から無為自然の真如の世界への還帰、虚仮

不実の自己から本来的自己への還帰と言うこともできよう。

かくしてわれわれが世界観を転換し、真実の世界に還帰し、本来的自己を取りもどすとき、それまでの自己と世界はまったく新しい姿を呈し、新たな意義と価値とをもってよみがえるのである。そしてわれわれは存在するすべてのものが真実を顕現し、真実を語りかけていることを発見するのである。すなわち穢土がそのまま寂光土に転ずるのである。そしてその時、われわれはここが阿弥陀仏の浄土であることを知り、経に「かの（無量尊の）厳浄の土の、微妙にして思議し難きを見て、よりて無上心を発し、わが国もまたしからんと願う。」（一六六―七）とあるように、浄土建設こそ自己の使命であり、無限に自己を浄化し社会を清浄化することこそ本来の自己の生き方であることを自覚するのである。

かくて浄土往生とは、経の「かの国に到りて、おのずから不退転（の位）に致らん。」（一六八）とか、「ことごとく正定聚に住す。」（一六三）とか、「一生補処に至らしめん。」（一三六）という叙述からも明らかなように、最高の正しく真実な生き方「無上正真の道」を体得し、この世界こそかかる生き方を実践していく道場であることを自覚することなのである。

経にしばしば用いられている「寿（命）終りてのち」という表現もこのように解すべきであろう。もしこの「寿」を肉体的生命と解するならば、往生は死を意味し、浄土は架空の存在となって、浄土の教えは単なる迷信と化すであろう。言うまでもなく、経に、浄土に「自然に化生す。」（二〇五）とあるように、この寿（命）は精神的生命を表わし、往生は精神的生命の転生を意味するのである。俗に人生の大転換をするとき「死んだつもりで」とか「生まれ変わる」という表現をするが、まさに往生とはこのことを言うのである。

この「再生」、生の転換は主我的作意的努力によって行なわれるのではなく、「その国は逆違せずして自然のひくところなり。」（一七八）とあるように、一切の我のはからいを捨て、阿弥陀仏の名、真実の声を至心に聞くことによって、真実の光に導びかれて「自然に無為の安きに昇る。」（二〇一）のである。階段を登るように段階的に往生するのではなくて、無心に真実の真実化のはたらきに乗ぜられて、横に一足跳びに往生するのである。

「道の自然なるを念じ」、「よろしくおのおの勤めて精進し、努力して自ら求める」ならば、「かならず（輪廻の世界を）超絶し去りて、安養国に往生することをうれば、横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉じ、道に昇ること窮極なし。」（一七八）

「救われる」ということ

ところで「救う」、「救われる」とは、いったいどのようなことを意味するのであろうか。

「如来は、無蓋の大悲をもって、三界を矜哀したもう。世に出興したもう所以んは、道教を光闡し、群萌を救い恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。」（一二六）

「錠光如来、世に興出して、無量の衆生を教化し度脱し、みな道をえしめて、すなわち滅土をとりたまいき。」（一二七）「無量の宝蔵は、自然に（心中より）発応し、無数の衆生を教化安立して、無上正真の道に住ぜしむ。」（一四五―六）「かくのごときの諸仏は、おのおの衆生を仏の正道に安立せしめたもう。」（一六二）「未度のものを度し、生死と泥洹の道を決正す。」（一八六）「福徳・度世・長寿・泥洹の道を獲しめん。」（一八八）「生死の苦を抜き、無為の安きに昇らしむ。」（二〇一）

これらの叙述をみるとき、「救う」とは、衆生に真実を教え、教化して眼を開かせ、仏の正道、最高の正しく真実な生き方を体得させ、

安心立命の境地に到らしめること、端的に言えば、衆生をめざめさせて自ら苦悩を克服する道を開かせることを意味すると言うことができよう。

迷いと苦悩の原因が無明である以上、真実による教化安立こそ最高の救済である。「もろもろの法薬をもって、三苦を救療す。」（一二二）とあるように、法（真実の教え）こそ苦悩の最大の薬なのである。またわれわれの最大の不安と苦悩は、生き方に係るものである。われわれは自己の歩むべき道がわからず、自己の生き方に確信がもてないとき、根源的な不安にとりつかれるのである。ゆるぎない安心立命の生き方の確立こそ人間の本来的な願いである。したがって「道をえしめ」「無上正真の道に住ぜしむ」ことこそ最高の救済ということができよう。事実われわれは真実を見いだし、自己の生き方を発見した時、「救われた」と感ずるのである。まさに「さとり」とは生き方の確立であり、「さとりの智慧」とは真実の生き方を選び取る智慧であると言えよう。

老病死や貧困はもちろん大きな苦悩であるが、その原因がわかり、克服する道を見いだすとき、われわれはその苦悩の渦中にありながら安心立命の境地に達することができ、自己の生き方をつらぬくためにあえて貧困にあまんじ、死をも恐れぬ実践をするようになるのである。真実を教え、自ら苦悩を克服する道を体得させることこそ真実の救済なのである。

かくて仏の大慈大悲とは、真実化のはたらきそのものであり、仏の本願とは一切衆生を無上正真の道に住ぜしむことであると言うことができよう。「浄土に往生して救われる」とは、聞名、念仏、浄土建設という生き方の確立にほかならないのである。

「安楽」ということ

「法蔵菩薩、いますでに成仏して、現に西方にまします。ここを去ること十万億刹なり。その仏の世界を、名づけて安楽という。」（一四六）

このように阿弥陀仏の浄土は「安楽」（梵文和訳では「幸いあるところ」）と呼ばれ、そこに生まれる衆生は清浄安穏にして微妙なる快楽をうることきわまりなしとされている。

幸福こそわれわれ衆生の最大の願求の対象であり、安楽や快楽は人間の追求してやまぬものである。阿弥陀仏の浄土がこのような衆生の根源的な願いを全面的に肯定し、人間の一切の願いがかなえられ、最高の快楽がえられるところとされていることは、人間性に対する深い洞察を示すものと言うことができよう。

ところで幸福や快楽の内容が問題である。

「たとい、われ、仏となるをえんとき、国中の人・天の受くるところの快楽、漏を尽せる比丘のごとくならずんば、正覚を取らじ。」（一四〇）

とあるように、浄土の快楽は煩悩に由来する後にむなしさと苦痛のつきまとう快楽ではなく、煩悩を離れた清浄な快楽である。

快楽や幸福は欲望が満たされ、不安や苦悩が克服されていく過程において感じられる満足感であるが、不安や苦悩の原因は無明煩悩であるから、真実こそ最大の快楽の源と言うことができよう。人間は真実を求めて迷い苦しむのであるから、真実への渇望がいやされ、安心立命の生き方が確立されたときほど大きな満足と喜びはない。真実に出会い、真実に包摂される喜びが「歓喜信楽」であって、この喜びこそ煩悩を離れた清浄な快楽であり、至福である。真実に導びかれるとき物質的肉体的快楽も清浄化され、苦に転ずることのない安楽となるのである。真実の生き方を実践する過程は迷いと苦悩を克服していく過程であり、苦悩に満ちた人生を喜びに満ちた人生へと転換していく過程である。

かくて浄土は法（真理）を見、聞き、語り、実践する歓喜に満ちた

「涅槃」の世界であり、そして聞名・念仏こそ至福への道なのである。

「波、無量の自然の妙声を揚ぐ。その所応に随って、聞かざるものなし。あるいは仏の声を聞き、あるいは法の声を聞き、あるいは僧の声を聞く。あるいは寂静の声、空・無我の声、大慈悲の声、波羅蜜の声、あるいは十力・無畏・不共法の声、もろもろの通慧の声、無所作の声、不起滅の声、無生忍の声、ないしは甘露灌頂（の声など）、もろもろの妙法の声、かくのごときらの声（を聞きて）、その聞くところに称って、歓喜すること無量なり。（しかもこの人）清浄・離欲・寂滅・真実の義に随順し、三宝・（十）力・無所畏・不共法に随順し、通慧と菩薩・声聞の所行の道とに随順す。（されば）三塗・苦難の名あることなく、ただ自然（に生ずる）快楽の音のみあり。このゆえに、かの国を名づけて、安楽という。」（一五六―七）

念仏菩薩道

阿弥陀仏は愚癡罪悪の凡夫のために念仏という浄土往生の道を確立し、廻向されたのであるが、この念仏と菩薩道たる六波羅蜜とはどのような関係にあるのであろうか。

至心に阿弥陀仏の名を聞くことは信の確立であり、念仏せんと思い立つ心は発菩提心である。それは浄土に往生し、仏となって共に救われんとの願い、すなわち願作仏度衆生心である。したがって至心に名を聞き、念仏せんと思い立つ心は菩薩の四弘誓願にあたると言えよう。

阿弥陀仏の本願―真実の真実化のはたらきを信じ、至心に聞名・念仏するとき、われわれの全人格が真実の光に摂せられ、全生活が真実化されて、真実のはたらきに乗ぜられ、自然に周囲の人々をも真実化せずにはいないのである。念仏の道は最高の布施、法施であって、まさに布施波羅蜜そのものと言えよう。

無心に行ずる念仏は、真実によって無明煩悩が清浄化されていく道であって、おのずから規律ある生活に導き、持戒波羅蜜の実践となるのである。

念仏ははからいを捨て、我性、我執我所執を無限に打破していく自己との激しい格闘の道である。真実の道は茨の道である。自己に打ち勝ち、いかなる苦難にも耐え、迫害や侮辱を忍んでひたすら真実に生きんとする念仏の道はまさに忍辱波羅蜜の実践である。また念仏は逆境に耐え、運命を切り開く力でもある。真実こそ難関での最大の拠り処なのである。

至心に名を聞き、念、念、仏を念ずる生活は努力の持続以外のなにものでもなく、一刻一刻真実への決意をかためる勇猛なる生き方であって、精進波羅蜜そのものである。

また念、念、仏を念ずることは、心の散乱をふせぎ、心を仏へと集中統一せしめて熟慮させ、禅定へと導く。念仏の生活こそ禅定波羅蜜の実践と言うことができよう。

念仏は阿弥陀仏の本願を信じ虚心に名を聞き仏を念ずることによって、真実の真実化のはたらきに乗ぜられて自然に真実の世界に帰入する道である。すなわち我のはからいを捨て無心となって真実にとらえられ、真実化されて、真実と一体になるのである。念仏する一瞬一瞬、仏にとらえられ成仏していくのである。まさに念仏こそ智慧波羅蜜そのものと言うことができよう。

かくて阿弥陀仏を念ずるとは、阿弥陀仏と一体となること、われわれ衆生がことごとく阿弥陀仏となって浄土を建設していくことである。これこそ阿弥陀仏の本願であったのである。

このように念仏の道は六波羅蜜を包摂する、と言うよりは六波羅蜜が帰入する最高の菩薩道であり、まさに「無上正真の道」であると言うことができよう。そして念仏の行者は浄土の菩薩として、菩薩とし

てのあらゆる功徳を具足するのである。

「それ、かの（阿弥陀）仏の名号を聞くことをえて、歓喜踊躍して、ないし一念することあらんに、まさに知るべし、この人は大利を得となす。すなわち、これ無上の功徳を具足するなり。」（二〇九―一〇）

南無阿弥陀仏

念仏は善導以来浄土教家達によって称名念仏として把握され、「南無阿弥陀仏」と口で称えることと解されてきた。

念仏を口称念仏とし、南無阿弥陀仏と称えることによって救われ、あの世で浄土に往生し、安楽を得ることができると説くことは、無学文盲の大衆を教化するうえで大きな意義をもつことであるが、同時に阿弥陀仏とその浄土を実体化、対象化し、念仏を呪文化して、浄土の教えを迷信に転化させる危険性が生ずると言えよう。事実そのとおりになり、科学の発達した現代では、浄土や念仏は迷信であり、死の近い老人の気安めにすぎないとされ、人々にかえりみられなくなってしまったのである。

しかし浄土や念仏を形式的観念的にとらえず、実践的に把握するとき、口称念仏はまた別の意義をもつのである。すなわち日常生活の中で阿弥陀仏を憶念し続けるということは、散乱放心の凡人には非常に困難なことである。心は言葉に表われ、言葉は心を規定するものであるから、日常茶飯時不断に口で称えることは、心を仏へと集中統一し、持続させるための最善の方法と言うことができよう。事実心が重い時や荒れ狂う時など、至心に念仏を称えると、心が静まり明るく清らかとなるのを感ずる。口称念仏は凡夫が日常生活において時処を問わず容易に実践でき、ただちに心を清浄にすることができる最も有効適切な方法であると言えよう。

ところで至心に名を聞き、念々仏を念ずる心は、阿弥陀仏への尊敬と絶対帰依を表わし、「阿弥陀仏の本願と教えを信じ、阿弥陀仏の導きに命をかけて従います。阿弥陀仏に南無（帰命）します。」という信と決意の表明にほかならない。念仏の道は阿弥陀仏を自己の命の帰趣として、全人生をかけて阿弥陀仏に随順していく生き方、「帰命無量寿如来」（南無阿弥陀仏）の生き方である。「帰命」とは、絶対的に自己を否定し、自己を無にして真理に包摂され、真理と一体となって真実の自己に帰り、安心立命の生き方を確立する絶対的自己肯定の道である。

かくて念仏とは「南無阿弥陀仏」であり、阿弥陀仏の名を聞くとは、「阿弥陀仏に南無せよ。」「われに帰命せよ。」という仏の命令を聞くこと、阿弥陀仏を念ずるとは、「阿弥陀仏に南無（帰命）します。」という信と決意の表明であると言うことができよう。そしてかかる仏とわれわれ衆生の呼応が成立するやいなや、即座にわれわれは阿弥陀仏の浄土に往生し、ここにおいて仏の光に摂取されている自己、真実に支えられ生かされている自己を発見し、大いなる安心と浄福を味わうことができるのである。かくして衆生が無限に阿弥陀仏に帰命する念仏の行者となっていくとき、国家社会は無限に清浄化され、阿弥陀仏の清浄仏国土は無限に完成していくのである。

「仏の遊履するところの国邑・丘聚、（仏の）化を蒙らざるはなし。天下和順し、日月清明たり、風雨時をもってし、災厲起らず、国豊かに民安んじ、兵戈用いることなし。（人々は）徳を崇め仁を興し、務めて礼譲を修む。」（二〇一）

願生浄土

かって釈尊は、「もろもろの悪をなさず、つとめて多くの善を行い、自ら自己の意を浄む。これぞ諸仏の教えなり。」（『法句経』第一三八偈）と説き、悪をなさず善を行ない社会を浄化するとともに、自ら自己の

意を浄めることこそ仏教の真理であることを明らかにされた。

人間が縁起的共生的存在であり、心は外界と縁起的相即関係にある以上、自己の浄化と社会の浄化は相即相関関係にあるから、自己の救済は一切衆生の救済なくしては不可能であり、一切衆生済度の実践の中においてのみ自己の救済も実現されるのである。そして念仏の道こそ自己の意の清浄化と社会の清浄化を総合統一する、一切衆生救済の道なのである。

かくて阿弥陀仏とその浄土の教えは、釈尊の教えの真実性を開顕し、仏教をさらに前進させたものであると言うことができよう。まさに『無量寿経』が釈尊によって説かれねばならないゆえんである。

人間は願いに生きる存在であるが、さまざまの願いの中で、最も強く、最も切なる願いは、よりよく生きたい、より人間らしく真実に生きたいという願いである。浄らかで真実な生活への願いは、浄らかで真実な社会への願求の念と相即する。この心の奥底からの願いを自覚するとき、われわれは阿弥陀仏の願いを自己の願いとしているのである。阿弥陀仏の四十八願はことごとくわれらの願いであり、人類の永遠にして普遍的な願いである。人間の歴史は人間の悲願が真実によって清浄化され、真実に導びかれて実現していく過程である。ここに阿弥陀仏とその浄土の教えの現代的意義があると言うことができよう。

また阿弥陀仏とその浄土の教えは、清浄仏国土、すなわち理想社会の建設こそ人類救済の唯一の道であることを強調するとともに、理想社会の建設は主我的作意的努力によるのではなく、聞名・念仏によって、すなわち至心に真実を求め、無心に真実に導びかれ、自己の心を浄めることと相即する実践によってのみ可能であり、自己の浄化をともなわない罪福を信じての打算的な理想社会建設の実践はかえって社会を穢し不幸にすることを明らかにしている。社会浄化と相即しない自己の浄化は独善的エゴイズムとなり、自己の浄化に支えられない社会浄化の実践は独善的英雄主義に堕し、社会を混乱させるのみである。多種多様な理想社会実現の思想と実践が氾濫し錯綜している今日、今一度われわれは阿弥陀仏とその浄土の教えに虚心に耳をかたむけるべきではなかろうか。

さて、聞名・念仏の道、南無阿弥陀仏の道こそ、無上正真の道であり、最高の菩薩道であった。ゆえに念仏の行者は浄土の菩薩として仏に護念され、菩薩達に讃歎され、その名は十方に通達するのである。

「菩薩よ、至願を興しておのが国も異なることならんと願い、あまねく一切を度さんと念わば、(その)名、あきらかに十方に達せん。」(一六八―九)

虚心に眼を開き耳をかたむけるならば、われわれは「人類の最大の教師」(六六)阿弥陀仏の弟子たる浄土の菩薩達が、浄土建設に励んでいるのを見聞することができる。されば菩薩達の言葉に耳をかたむけ、発心して念仏の行者となって、共に浄土建設に邁進することこそわれらの使命と言うことができよう。

「寿命、はなはだえ難く、仏の世、また値い難し。人、信・慧あること難し。もし、(法を)聞かば、精進して求めよ。法を聞きて、よく忘れず、(法を)見て敬い、得て大いに慶こばば、すなわちわが善き親友なり。このゆえに、まさに意を発すべし。たとい、世界に満てらん火をも、かならず過ぎて、要めて法を聞かば、かならず、まさに仏道を成じて、広く生死の流を済うべし。」(一七〇)

註一　康僧鎧訳『仏説無量寿経』中村元、早島鏡正、紀野一義訳註、『浄土三部経』上巻(岩波文庫)をテキストとした。引用文の末尾の数字は同書の頁を示す。なお、同書の梵文和訳、及び坪井俊英著『浄土三部経概説』(隆文館、一九六五年刊)その他を参照した。本文中において『無量寿経』は、経、と略して用いた。第十八願の「唯除五逆誹謗正法」の文は、善導の『散善義』及び親鸞の『尊号真像銘文』の解釈に従い、ここでは論外とした。

註二　岡山県立短期大学研究紀要第十四号(一九七〇)所載
(昭和三十七年三月三十一日)